Cross-Cultural Interchange & Research Institute Newsletter No.21 2021
Yamaguchi University Faculty of Humanities
21号
2021
山口大学人文学部
異文化交流研究施設ニューズレター

仏をめぐる説話の受容

柏木　寧子
（かしわぎ　やすこ）
人文学部副学部長

日本における仏法公伝は６世紀半ばのこととされる。当時仏は「蕃神（異国の神）」とよばれ、仏像・仏具や経巻の壮麗な外観で人々を魅了する一方、祀られなければ祟りをなす存在として恐れられもした。在来の神とは異質の超越として仏が日本思想の一基軸となるまでには異文化とのさまざまな形の接触が積み重ねられたと考えられる。仏にかかわる説話の受容もその一つである。

仏にかかわる説話には、悉達太子としての誕生から出家・成道を経て涅槃までを語るいわゆる仏伝と、数多の前生における菩薩としての修行を語る本生譚の二種がある。仏伝については、まとまった形をもつ仏伝経典が流布する以前から、誕生・涅槃といった主要事蹟にかかわる説話が知られていたと考えられる。そもそも公伝時にもたらされた仏像は、一説によれば誕生仏であり、誕生仏の制作、諸寺における灌仏会の実修は飛鳥時代から始まっていた。また奈良時代の初めには法隆寺五重塔初層北面に涅槃を表現する塑像群像が制作され、薬師寺においても、東西三重塔初層に入胎・受生から涅槃・分舎利まで八事蹟を表現する「八相図」が塑像群像により制作されていたという。

他方、釈迦仏前生の修行を語る本生譚については、法隆寺玉虫厨子の装飾画として描かれる二つの本生図、捨身飼虎図および施身聞偈図が、古くからの受容を伝えている。うち前者は、七頭の子虎をもつ母虎が飢えて死に瀕するのを見た薩埵王子（前生の釈迦仏）が、わが身を施し虎たちを救ったという説話を図像化したもので、自らの着衣を木の枝に掛ける王子、高所から身を投じ落下する王子、地に倒れ虎たちに身を食われる王子の三相が一図に配されている。

筋立てだけを見れば異様きわまりない話であるにもかかわらず、絵は繊細で美しく、理解・共感をもってこの話が受けとめられていたことが窺える。我々の目にこの話が荒唐無稽と見えるとすれば、仏法が説く輪廻の思想や衆生観（生きものはみな無限に生死を繰り返す存在であり、現生に人として生まれた我々にも畜生としての前生・後生があり得る。どの生きものもいつか救われるべき存在として根本的差別はない）、時空を超える因果や縁の思想（現生になす利他行は、それ自体不完全だとしても、成仏した後生に相手を完全に救うための因となる。現生に親を悲しませても、成仏した後生に再会するならそのとき真に孝を尽くすことができる）について、今日十分に知られなくなっていることによるのだろう。

数多の前生に修行を重ね、最終的に解脱・涅槃に至った釈迦仏は、いわば幸福な終極をもつ大きな物語の主人公であり、究極の勝利者である。だが、そうと知った上で読むとしても、薩埵王子の話の悲しさはどうしようもない。残された父母の歎きは痛ましく、こうした話を受容し得た古代の人々の理解力に驚かずにはいられない。

日本で最初の本格的仏伝『今昔物語集』が成立するのは平安時代末期である。各種仏伝経典を踏まえ、誕生から涅槃まで生涯の全体を語る。そこに描かれる仏は、父が泣いて制止すると出家をためらい、天界で生母と再会すると限りなく喜ぶ孝子である。また臨終には一目わが子と会うまで死ぬに死にきれない、子煩悩の父である。『涅槃経』が描くような、あくまでも弟子を導く偉大な教主としてでなく、人並みに子煩悩な父として死ぬさまを描いたのは、日本的な仏理解なのか、中国・朝鮮における仏理解の継承なのか。いずれにせよ、蕃神として始まった仏理解の成熟をここに見ることができるだろう。恩愛深い人として仏を描くとき、仏伝制作者は、数多の前生に父母を歎かせた仏が、その父母の悲しみを忘れていなかったことを暗に伝えているのではなかろうか。仏伝を読む人々は、薩埵王子の父母の歎きが最後の最後に確かに報われたことを知り、安堵したのではなかろうか。